

令和六年度

国語問題（L）

前期日程

〔注意〕

- 1 問題冊子および解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 2 受験番号は、解答用紙の受験番号欄（計八か所）に正確に記入すること。
- 3 問題冊子のページ数は、表紙をのぞき十六ページである。脱落している場合は、ただちに申し出ること。
- 4 解答用紙は四枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 5 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 6 問題冊子の余白は適宜下書きに使用してよい。
- 7 解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 8 問題冊子は持ち帰ること。

次の文章は、わたしたちの因果関係のとらえ方において、科学的因果性とは異なる「物語り」が重要な役割を果たしていることについて論じたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。

たとえば、リンゴが樹木から落下したとしよう。われわれは通常、その原因はリンゴが熟したからだという。他方で、科学的説明はその原因を重力の作用に求めるであろう。だが、重力は二つの物体の質量と距離によって決まるものであり、そこにあるのは複数の物理量の間の関係のみである。たとえ初期条件を原因としたところで、時刻 t における重力の値について、その時点での質量が原因か距離が原因かを言うことはできない。言えるのは、時刻 t における物理系の状態全体が原因だということだけである。

樹木から落下したリンゴは、地上を這い回る蟻^{あり}の上に着地するまでは落体の法則に従う。この場合もわれわれは、リンゴが枝を離れたことが原因で地上の蟻が押しつぶされた、と言うであろう。だが、科学的見方をとれば、蟻が死んだ原因は、時刻 t_0 に枝を離れてから時刻 t_1 に地上に到着するまでの、どの時点のリンゴの物理的状态であつてもかまわないはずである。それどころか、 t_1 時のリンゴの物理的状态が原因で、次の t_2 時のリンゴの物理的状态を結果したとすら言える。そして、この時間間隔は極限まで縮めることが可能である。だとすれば、この場合の原因―結果という因果関係の力テゴリーは「空転する歯車」であり、正常な機能を果たしていないと言うべきであろう。

ヒュームは因果関係の成立条件として、原因と結果の時空的隣接性、原因の結果に対する時間的先行性、原因と結果の必然的結合（恒常的連接）の三条件を挙げたが、科学的説明は時空的隣接性と時間的先行性を極小化し、連続性に融合させるのである。これは、自然科学がミクロスコピック（微視的）な連続的変化の描写を目指すものである以上、当然のことであろう。他方、われわれが原因を探し求めるのは、たとえ変化は連続的であろうとも、時間的に先行する独立の離散的事象に対してである。それゆえ、われわれは蟻の死の原因をリンゴの落下の中間段階ではなく、リンゴが枝を離れた瞬間に求める。このことは、原因―結果の概念が本来的に適用されるのは、メゾスコピック（中規模）な人間のスケールの事象であることを意味す

る。つまり、われわれは自然の連続的変化の中に人間の関心に従って切れ目を入れ、そこに見出される離散的事象を原因あるいは結果と称するのである。その意味で、この生活世界的カテゴリーとしての因果概念を「物語りの因果性」^①と呼ぶことができる。人間が語る「物語り (narrative)」こそ、因果概念が生きて働く場であるからである。

その観点からすれば、自然科学が連続的であるはずのミクロスコピックな領域に因果関係を設定するのは、この日常的用法のいわば極限形態であり、原因—結果のメタフォリカルな適用にはかならない。実際、生命科学者がDNAの塩基配列を原因としてタンパク質の生成を語るとき、彼／彼女らは連続的な分子レベルの自然現象の変化の中から人間の関心に即して、人間の生体にとって重要な役割を演ずる原因と結果を選び出しているのである。

同じことは脳状態にも言うことができる。脳状態をミクロスコピックに見るかぎり、そこには神経細胞群の自己組織化を含む連続的変化があるだけであり、「信念の獲得」や「決断」などの心的状態に対応する自然的切れ目が存在するわけではない。これは可視光線のスペクトルに「赤」や「青」の区別を示す波長の物理的切れ目が存在しないのと同様である。たとえば、ハムレットが「生きてとどまるか、消えてなくなるか、それが問題だ。どちらが雄々しい態度だろう」と独白してから、オフィーリアに向って「尼寺へ行け、さようなら」と別れを告げるまでの心的状態の変化は、逡巡^{しゆんじゆん}から決断へと非連続的であろう。しかし、それに対応するハムレットの脳状態は、ある物理的状态から次の物理的状态へと自然法則に従って連続的に遷移しているはずである。そうでなければ、何か超自然的な力が彼の脳状態を変化させたことになるが、それは科学的知見に反するであろう。それゆえ、特定の脳状態を逡巡や決意として同定できるのは、あくまでも心的状態の非連続性に依拠してのことである。だとすれば、原因—結果のカテゴリーを本来的に適用できるのは、脳状態ではなく、心的状態だと言わねばならない。

このことは、因果関係の適用対象が、もともとメゾスコピックな人間的事象であるという考えとも合致する。すなわち原因—結果のプロトタイプは、心的状態を帰属させることが可能な個人の行為なのである。そして、心的状態は非連続的・離散的であり、行為もまた時空的に完結した出来事であるがゆえに、そこには原因と結果を結びつける背景としての「物語り」が

必要とされる。大庭健の言葉を借りれば、「何気ないささいな行為においてさえ、状況の認知、周囲の人たちの抱いている予期・期待、当人の中長期の計画などなど、多くの事が前提となつてゐる」のであり、物語りはそれらの前提をも含めた舞台装置をしつらえるものである。したがって、行為の「責任」が正当に問われうるのもまた、そのような「物語り」という場においてであると言つてよい。

行為の責任が最も厳しく追及され、意図と行為の間の因果関係が問われるのは裁判過程、すなわち法廷の場においてである。「物語は、法廷のさまざまな登場人物たちが裁判の展開を理解して争点について推論することを可能にするコミュニケーションの形式である」と主張するベネットとフェルドマンは、法的判断において物語りが果たす役割について、次のように述べている。

ある社会的行為の意味、つまりその行為が引き起こす関心とその行為の意義は、誰が・何のために・どのような手段で・どのような文脈において・その行為をするのか・その行為がいかなる種類の発端と結末を備えているのか、ということに依存する。端的にいえば、物語とはひとつのコミュニケーション形式であつて、場面、行為、行為者、手段、意図という物語を構成する諸要素の文脈において、行為が展開され、クライマックスをむかえ、結末が与えられるのである。物語は、ある行為をさまざまな時間的・空間的な諸要素のなかに配置するのであるが、その結果、単にある中心的行為に焦点を当ててその行為についての判断を可能にするばかりでなく、その行為の意味について明確な理解ができるか否かを左右する力をも有しているのである。

間然するところのない説明であろう。物語りは行為の意味を理解し、その責任を判断するための不可欠の概念装置なのである。ここで物語りが「コミュニケーションの形式」として特徴づけられていることに注目しておこう。大庭が述べるように、責任とは「応答可能性」の間柄にあることであり、その応答は何よりも行為の理由について説明し理解するところに存する。

その意味で、「物語り」とは応答を可能にするコミュニケーションの場だと言ってもよい。^③ 行為の責任を問われるのは、基本的に過去の出来事についてである。そして、過去の行為と現在の自分という二つの出来事を結びつける言語的営みこそ物語り行為にほかならない。それは同時に、因果関係を明らかにし、理由を説明する言語行為なのである。

人間が行為の「自由」をもち、行為の結果について「責任」を負う存在であるとすれば、その存立基盤は行為の理由について「物語る」という能力にこそ存する。デカルトもまた、人間と動物の注目すべき違いについて、人間ならば「いろいろなことを集めて配列し、それでひと続きの話を組み立てて自分の考えを伝えることができる」ことを挙げていた。それゆえ、動物と機械に挟撃されて宙吊りちゅうぶになっている人間のアイデンティティあいかの在処を見出すとすれば、それは「物語るヒト」すなわち「ホモ・ナランス (homo narrans)」であるところこそ求められねばならない。もちろん、これは動物や機械を人間から区別することではあれ、差別することではない。逆に言えば、チンパンジーが図形言語によって、あるいは代理人を立てて行為の理由を物語ることができ、コンピュータが物語り能力を加えたチューリング・テストに合格するならば、彼／彼女らはもはや「ホモ・ナランス」に属するのであり、それに応じた「人権」を認められてしかるべきであろう。そのとき、「ホモ・ナランス」としての人間の自己認識は、これまでにない新たな段階へと踏み入るはずである。

(野家啓一「ホモ・ナランス (homo narrans) の可能性」による)

*プロトタイプ——基本型、原型。

*チューリング・テスト——問いに対して人間のように回答するよう作られたコンピュータが、質問者を実際に欺けるかをテストするという思考実験。それによって「知能」の有無を判定できるとする考えを、数学者のアラン・チューリングが一九五〇年に提唱した。

問一 傍線部①「物語りの因果性」と、著者の言う「科学的説明」との違いを説明しなさい。

問二 傍線部②について、原因―結果のプロトタイプが「個人の行為」であるとはどういうことか、説明しなさい。

問三 責任と「物語り」との結びつきについて、傍線部③をふまえて説明しなさい。

問四 「人間のアイデンティティ」と物語ることとはどのような関係にあるのか、本文全体をふまえて説明しなさい。

Ⅱ

次の文章は、坂崎かおる「母の散歩」の一部です。佐知子は、母のコートのポケットからクリーニング店の預かり証を兼ねたレシートを発見します。仕上がり予定日は半年以上前、母が入院していた頃のことです。以下は、「ネクタイ」と印字されている預かり証に首をかしげつつ、クリーニング店を訪れた後の佐知子について書かれています。これを読んで後の問いに答えなさい。

「お待たせしちゃって」

店主が大きな声で戻ってきた。手には透明なビニールで包まれたネクタイがある。臍脂色。それを受けとりながら、これは誰のものなのか佐知子は考えた。順当に考えれば父のものだ。母の筆筒には、まだ父のものが大量に残っていた。だが、彼女の記憶の中で、あまりこういった色のネクタイを締めている父を思い出すことはできなかった。

「意外に多いんだよね、クリーニングの受けとり忘れて」(中略)

そうなんです、と頷く佐知子に、店主はああそうだ、と思い出したように付け加えた。

「そのバスケットは返さなきゃいけないんだって」

「返す？」

店主によれば、バスケットは、〈架空の犬〉のダイエットプログラムを提供する団体のもので、母はそこと契約していたらしい。バスケットはそのプログラムのレンタル品ということだった。

「郵送でも返せるみたいだけど、でっかいし、いつもだったら公民館に係の人がいるよ」

場所わかる？ という質問に佐知子が首を振ると、店主は右手でチラシの裏に地図を描こうとしてくれた。(中略) 右手のネクタイを見て、手提げの袋をもらえばよかったな、と佐知子は思った。臍脂のしつぽをぶらぶらさせながら、佐知子は公園を目指し、商店街を南に下った。

(中略)

「ヘビタくん」と呼ばれた彼は、「犬のバスケットの返却ですよね」と言った。

「ええ」

佐知子は頷き、男を見た。大学を出たばかりという感じで、真新しいスーツはサイズが合っていないかった。暑さのせいなのか、ネクタイはしていない。ふと、佐知子は兄の直哉のことを思い出した。(中略)

「リードは」

バスケットを置いて戻ってくると、ヘビタくんが訊ねた。

「リード？」

「ええ」彼は紐をもつジェスチャーをした。「リードも一緒にレンタルしているんです」(中略)

「ないとだめですか」(中略)

確認してみます、と携帯を出し、彼はその場を離れた。(中略)

「結論から言うと、やはりリードは返してもらわなければなりません」

ヘビタくんは事務的に申し訳なさそうな顔をした。佐知子が落胆とやや苛々した表情を見せると、慌てたように「ああ、でも」と付け加えた。

「今すぐってわけじゃなくてもいいですし、なんだったら、うちのリードじゃなくても構いません」

「どうということ？」(中略)

「ていうか、リードじゃなくても、紐つばいならなんでもいいですよ」

紐つばい、の、「ぼ」あたりで、ヘビタくんは佐知子の持つネクタイを見だし、佐知子もそれを見た。微かに臍脂のそれは先が揺れている。彼は口を開きかけ、佐知子と目が合い、結局口を閉じた。

「ま、いつでもいいです」

締めくくするようにヘビタくんは言い、佐知子に「預かり証」と書かれた控えの紙を手渡した。(中略)

首を少し反らせるヘビタくんを見て、喉仏だ、と佐知子は思った。彼の喉仏は、兄のそれと似ていた。完璧な二等辺三角形。直哉は同じように首を反らせ、水を勢いよく飲んでいた。その口元から滑り落ちる水滴の行方を佐知子は今も覚えていた。直哉のブレザーは濡れ、それに構わず、喉がぐっぐつと音を立てていた。それは、永遠に失われた骨だった。

(中略)

家に着くと、積まれた段ボールのいくつかに触り、中を覗き、また閉めるという作業を無為に繰り返した。ネクタイはとろあえず、まだなにも入っていない、空っぽの段ボールに入れた。横たわるそれはどこから見てもネクタイで、それ以上ではなかった。

水道からコップに水を注ぎ、一気に飲み干したとき、また喉仏を思い出した。直哉の喉仏は、くつきりと、それは見事に首に浮かんでいた。兄のしゃがれた声と、その白く突き出た肌を見ると、佐知子は胸が高鳴った。母はその二等辺三角形を大げさに褒めそやし、兄は思春期らしいじとりとした目で見返した。直哉は声変わりが完全に終わる前に死んでしまったので、それからその喉仏がどうなっていく予定だったのか、佐知子たちにはわからずじまいになった。

火葬の日、葬儀場の職員が、白い手袋をはめて、ひとつひとつの焼け残った骨の説明を始めた。しつかりした大腿骨だいたいこうですね、とか、頭のお骨が少し残っていて聡明なお子さんだったんでしょう、とか、そう言った説明のときに、喉仏の話が出た。本当の喉仏は軟骨なので燃えてなくなってしまうため、火葬したときに残るのは第二頸椎けいつい、首のこのあたりですね、こちらの骨になります。ほら、仏様が座禅をしているように見えるでしょう、お定まりの説明がしばらく続いた。

「じゃあ、嘘うそなのね」

滔々とうとうと職員が説明を終えたあとで、母はそう言った。嘘。^①その職員は瞳を揺らしながら母の言葉を繰り返した。すると母は、「これは本物の喉仏じゃないのよね」と続けた。まあ、と職員は答えた。医学的には、そうなります。

「そう」

じゃあいいらない。佐知子は、そう母が言いだすのではないかと思った。しかし、彼女は黙ったままだった。そのまま、決し

て自分で骨上げはせず、父や佐知子がする様子を、じっと見つめていた。

母が最初に架空の犬を飼いだしたのは、そのあとだった。犬を飼うから、と唐突に宣言し、トマトのような色のリードを買ってきた。でもリードだけだった。ときどきは姿の见えないそれを抱え、頭を撫でた。慣れた手つきだった。佐知子と父は話し合い、そつとしておくことに決めた。だが、佐知子は母の散歩にはなるべく付き添った。朝は六時、夕方は五時。リードを片手に持ち、揺らしながらずんずんと歩く彼女の横を、後ろを、佐知子は共に歩いた。佐知子は、母が家を出ていったきり、戻つてこなくなることを自分は恐れているのだと思つていた。いつてきますも、ただいまも言わない彼女が、ある日ふと消えていなくなつてしまふのではないかと。

佐知子は水をもう一杯飲んだ。今日はやけに喉が渴いた。部屋は薄暗いが、明かりをつける気分にはなれなかった。この家にあるなにもかもがはつきりと見えてしまいそうだった。

母が散歩をやめたのは突然で、予兆も予告もなかった。朝六時を過ぎても母はいて、台所でご飯を作つていた。佐知子は声をかけようとして、ゴミ箱にリードが捨てられているのを見つけた。彼女は黙つていたが、振り向いた母は、その視線に気がついた。

「もう犬はいないよ」

安心して、というように、明るい声で母は言つた。佐知子は曖昧な顔で頷いた。ずっと犬がいる生活が当たり前だったのだ、こうして母だけが立つている、という状態はどこか不自然に感じた。自分はそれが見えたことなど一度もないのに、母からはなにかが損なわれていた。それでも、晴れ晴れとした表情の母を見ると、少し心が落ち着いた。元のような生活に戻るのかもしれない、と佐知子は子供心に思った。

「犬はどこに行つたの？」

佐知子は母に訊ねた。それが不用意な質問であることは、母の表情を見てすぐに気がついた。遅かった。

「首を絞めたよ」

母は短く言った。「もう必要なくなったからね」

②「そうなんだ」の「そ」の形で佐知子の唇は止まった。首を絞めた。なんと返事をしていいかわからず、佐知子は、「それは」と辛うじて続けた。「それはなんだかわいそうだね」

「かわいそうなんてことあるもんかい」母はもう背を向けて、卵を割っていた。「想像の犬だよ。誰も、なにも、傷ついていない。傷つけていない」

そのまま佐知子は、静かに踵^{きびす}を返し、台所を出て、家を出た。いつもの散歩コースをひとりで歩いた。リードはなかったから、中途半端な気分で、腕を大きく振って歩いた。佐知子は、母の腕から垂れ下がり、ゆらゆらと彼女の歩調に合わせてリズムよくゆれるリードを想像し、考えていた。その先に繋が^{つな}がれたものを、姿を、形を。わからない。自分には見えない。触れない。それはもう、去ってしまった。

物音がして、振り返った。あのころから歳月を重ねたはずの母の家は、ものが溢^{あふ}れているのにがらんだ。目を凝らす。でも、凝らすだけだ。佐知子はようやく部屋の明かりをつけた。蛍光灯に照らされる段ボールの山は、高さがそれほどないくせに、寒々としている。③佐知子は空っぽだった段ボールから臘脂色のネクタイをとりだすと、筆筒の上にいる母の白い骨壺^{ぼた}に巻きつけた。距離をとる。眺める。母の骨の中に喉仏はあっただろうか。あったはずだ。たぶん。鼻がむずむずと、くしゃみの予感がして、でも、なにも起こらなかった。

(坂崎かおる「母の散歩」による)

問一 傍線部①「その職員は瞳を揺らしながら母の言葉を繰り返した」のはなぜか、その理由をわかりやすく説明しなさい。

問二 傍線部②「『そうなんだ』の『そ』の形で佐知子の唇は止まった」のはなぜか、その原因である母の言動もあわせて説明しなさい。

問三 傍線部③「佐知子は空っぽだった段ボールから臍脂色のネクタイをとりだすと、筆筒の上にいる母の白い骨壺に巻きつけた」のはなぜか、説明しなさい。

問四 波線部④「臍脂のしつぽ」という表現にはどのような効果があるか、本文全体の内容をふまえて説明しなさい。

III

次の文章は、擬人化された鳥が登場する物語の一部です。京の祇園林に住む鴉の真玄は、驚の山城守正素の娘（「姫」御料人）とも呼ばれるの評判を耳にし、思いを募らせています。これを読んで後の問いに答えなさい。

真玄、身の程もなくうちそぞろいて、やがて「婿にならん」と申しければ、山城守はなかなか思ひよらざる事にぞいひける。真玄、「さては我を嫌ふごさんなれ。」その儀ならば押し寄せて奪ひとりて恥を与ふるか。いひかくるこそ不祥よ」など、あふ者ごとに向かひて遠慮もなく荒言をぞ放ちける。しかれども山城守は、「沙汰のほかの奴」とて是非をいはざる所に、真玄、かの姫の召しつかひける下司、千鳥といふに語らひ寄り、頼みて心の奥をつぶさに語りければ、「さん候ふ。殿の御心、人に似させ給はで。その御事にて候へども、あまりにうけたまはり候へば、一筆たまはりて、およびさまに御料人のたよりをうかがひ候はん」といふ。うれしさとびあがるばかりにて、墨淵の硯をならし、鶏距の筆をさしぬらし、黒みがちなるほどに書きみだし、千鳥に取らせけり。この文を持ちて、かの姫の乳母に連れて河あそびに出でける所にて、少し思はせてさし出たす。姫「なに文ぞ」とて開きて見るに、「祇園林より、御料人へ参らせらるる」といへば、「うつつなや」とて顔うちあかめて捨てけり。乳母取りあげて見るに、

(ア) 近江なる、伊香具の海のいかなれば、みるめもなきにと思へども、恋しき時は鳥羽玉の、夜の衣を返しつつ、君に心は月夜がらす、音にたててなくばかりなる恨みには、うち寝ぬほどの関守に、夢路さへ隔てつる中となりにけり。あふ瀬も涙の深き川に、浮き沈みたる心の闇、たどりたどりて憂き身のほど、ありとだに知られぬ恋の世を恨み、しのぶもぢずり誰ゆゑと、かこつべきたよりもなくて明かし暮らし、かの柏木の衛門の督、二品の宮の御事、思ひ乱れしころかとよ、行方なき空の煙と嘆きけんも、今さらかかる身に知られつつなん。

とまで書きみだして、

ⓧ 音にのみきくの白露いつの間に淵となりては浮き沈むらん

とあり。乳母、「浅ましなながら、返歌せぬは七生何とやらん」と、晋銀の硯に向かひて、白麻の紙を取りて、

よしやただ淵ともつもれ涙川⁽¹⁾浮き沈むともあふ瀬あらめや

と書きて、千鳥に投げ出だす。これを取りて真玄に見せければ、^{*}むげはなちなる返事なり。^②さりとて思ひやむべき心ならねば、^{たまづ}その後も玉梓たびたびなり。

(『鴉鷺物語』による)

*ござんなれ——「にこそあるなれ」が短縮された形。

*さん候ふ——「さに候ふ」と同じ。

*およびざまに——およばずながら。行き届かないとは思うが。

*墨淵の硯をならし、鶏距の筆をさしぬらし——墨をすり、筆を墨でぬらして。

*夜の衣を返しつつ——夜、衣を裏返しに着て寝ると、夢で恋しい人に会えると信じられていた。

*柏木の衛門の督、一品の宮——『源氏物語』の柏木と女三宮のこと。

*返歌せぬは七生何とやらん——返歌をしなければ、七度生まれ変わっても悪い報いを受けると言われていた。

*晋銀の硯に向かひて、白麻の紙を取りて——硯に向かい、紙を取って。

*むげはなちなる——突き放したような。すげない。

問一 傍線部①②を文脈に即してわかりやすく現代語訳しなさい。②は、「さり」とて」の内容を明らかにし、動作の主体・対象を補って訳すこと。

問二 傍線部(a)について、誰のどのようなことばを受けて、何をしようというのか、説明しなさい。

問三 傍線部(b)について、誰が、どのようなことをしようといっているか、具体的に説明しなさい。

問四 傍線部アは、「近江なる伊香具の海のいかなればみるめなきに人の恋しき」（『今昔物語集』）という和歌をふまえている。「みるめ」における、海藻（「海松布^{みるめ}」）ではないもう一つの意味を明らかにしながら、傍線部に込められた文の書き手の心情を説明しなさい。

問五 傍線部イは、㊦の和歌に表された誰のどのような思いに對し、どのような返事をしているか、わかりやすく説明しなさい。

問六 傍線部Aは、文を送った相手に対してだけでなく、この物語を読む読者に対しての表現効果もねらって書かれている。読者に対してどのような表現効果があるか説明しなさい。

IV

次にあげる文章を読んで後の問いに答えなさい。設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した箇所があります。

楚国^ニ有^リ担^フ山^ヲ鶏^者^上。路^人^{*}問^{ヒテ}曰^ク「何^ノ鳥^ト也」。担^者^{キテ}欺^フ之^ヲ曰^ク「鳳凰^也」^ト。

路^人曰^ク「我^ク聞^ク有^{リト}鳳凰^ニ久^シ矣。今^ニ真^ニ見^ル之^ヲ。汝^{ラン}売^ラ之^ヲ乎」。担^者^フ曰^ク「然^{リト}」^ト。

路^人乃^チ酬^ムニ^{コルモ}千^金。担^者^フ不^レ与^ヘ。路^人請^{ヘバ}加^{フル}倍^ヲ。担^者^フ乃^チ与^フ之^ニ。路^人

将^レ献^ニ楚^王。翌^日鳥^死^ス。路^人不^レ惜^{シマ}其^ノ金^ヲ。唯^{ムル}恨^レ不^レ得^テ以^{ズル}献^ニ耳。楚^国

人^フ伝^バ之^ヲ。皆^{オモ}以^{ヘラ}為^ク真^ニ鳳^凰。宜^{シク}献^ス之^ヲ。遂^ニ聞^{コユ}於^ニ楚^王。楚^王感^ジ其^ノ欲^{スル}献^{セント}

己^ニ。召^{シテ}而^ク厚^{タマフ}賜^レ之^ニ。過^グ下^{コト}。買^フ鳳^凰之^ヲ。值^上十^{ナリ}倍^矣。識^者無^ク不^レ笑^ス之^ヲ。

(邯鄲淳『笑林』による)

*路^人——通りすがりの人。

問一 傍線部①「我聞有鳳凰久矣。今真見之。汝売之乎」を現代語訳しなさい。

問二 傍線部②「路人將獻楚王」を現代語訳しなさい。「獻」の対象となるものを明示すること。

問三 傍線部③「皆以為真鳳凰、宜獻之」を現代語訳しなさい。「以為」「獻」の主語を明示すること。

問四 傍線部④「識者無不笑之」を、すべて平仮名を用いて書き下し文に改めなさい。現代仮名遣いでもよい。

問五 傍線部④「識者無不笑之」とあるが、なぜ識者はこのような態度を示したのか、傍線部(a)「請加倍」および傍線部(b)「過買鳳凰之値十倍矣」をふまえてわかりやすく説明しなさい。